

# バカロレア改革の現状と課題

—COVID-19 対応から見える問題点—

阿部和久, 倉元直樹 (東北大学)

フランスの後期中等教育修了資格認定試験制度の改革 (以下, 「バカロレア改革」と表記する) は, 2018年の公表から5年を経て, ようやくその全貌が明らかになった。ちょうどその過程でCOVID-19が蔓延し, 急遽対応に迫られることとなった。本稿ではバカロレア改革推進過程におけるCOVID-19対応について検討した。2020年6月のバカロレアは中止され, リセの内申点だけで合格者を出すなど, 制度の根幹を揺るがしかねない重要な決定も下された。内申点の基準やバカロレアの評語取得率, 留年率等の指標に, 当該年度の受験生に有利に働く「過剰な調整」の痕跡が見られた。

キーワード: バカロレア改革, COVID-19, パルクールシュップ

## 1 問題と目的

本稿の目的は, 2019年から2022年まで進められてきたバカロレア改革の推進過程における COVID-19 への対応を検証し, その問題点を探ることにある。

COVID-19 の蔓延は, 大学入学者選抜に関わる世界中の担当者に, これまで経験したことのない対応を迫った (大学入試センター, 2022)。従来の選抜方法が適用できない事態の中で, それまでと同等に近い代替の選抜方法や選抜基準を確保することが課題となった。とりわけフランスでは, バカロレア改革が実行に移るタイミングで COVID-19 に襲われた。計画されていた制度改革と COVID-19 への対応が輻輳し, フランスの大学入学制度は大きく動いている。

バカロレア改革が惹起した問題に関する研究としては, 坂本 (2020) がある。「平等と選抜のフランス的ジレンマ」という副題が示すように, これまで建前として保持されてきた平等主義に, 事実上の選抜制度が導入されたことによって生じた混乱が分析される。

高大接続の観点からバカロレア改革の問題を研究したものには細尾 (2018) がある。改革によって新たに導入されることになった内申点の問題が論じられる。日本の内申点の問題と共通するものも多いが, 「国家がコントロールできない内申点の導入は, その放棄につながりうる (教員の教育方法の自由)」 (細尾, 2018: 2) という指摘は注目される。フランスは我が国と比べると中央政府が強い権限を持つ「中央集権国家」的性格を持っている。例えば, フランスでは学位を授与できる大学 71 校はすべて国立であり, 学位授与可能な「私立大学」は存在しない。内申点の問題は, 国家が教育水準を保証するという教育理念に対する危

機として認識されたことを, 細尾の指摘は示している。

一方, バカロレア改革と COVID-19 の関連についての研究は, まだあまり多くない。その中で 2020 年のバカロレアの評語取得率に注目したのが坂本 (2021) である。2020 年はバカロレア試験が実施できず, 受験生が所属するリセの成績だけで合否を決定した。その結果, バカロレアの合格率や評語 *Très bien* の取得率 (80%以上得点して合格した受験生の割合) が通年より著しく高い数値を示した。その状況について「リセの平常点が高めにつけられている傾向がある」 (坂本, 2021: 114) と指摘した。この指摘は, COVID-19 の蔓延状況を考慮し, 様々な教育的基準を実質的に緩めるような措置が, 国民教育・青少年・スポーツ省 (以下, 「国民教育省」と表記する) や高等教育・研究・イノベーション省 (以下, 「高等教育省」と表記する) を含め, 他の教育機関でもなされたのではないかという疑念を抱かせる。ただ坂本の執筆時期が 2021 年 5 月であったため, 同年 6 月及び翌年 6 月に実施されたバカロレアの結果については触れられていない。そこで坂本が示唆したものに 2021 年 5 月以降のデータを付加し, その懸念が現実のものとなったのかどうかについて検証する。その際, 項目によっては, リセと大学のデータを重ね合わせて分析し, 問題を重層的に解明する。さらにリセ内部で成績調整に使われるデータなどにも目を配り, 受験生の置かれた状況をできるだけ具体的に捉え, 問題の背景を探る。

## 2 方法

国民教育省及び高等教育省の公式資料を中心に, 両省の大臣の記者会見時における発言や, 新聞報道等か

ら得られる情報に基づき、バカロレア改革過程における COVID-19 への対応とその問題点を分析する。

### 3 バカロレア改革の概要

#### 3.1 バカロレアの定義

バカロレアとは、フランスにおける後期中等教育の修了認定資格であると同時に、大学入学や各種国家試験の出願が認められる資格である。その資格を得るための試験も含めてバカロレアということが多い。

#### 3.2 バカロレアの基本

バカロレアには普通バカロレア、技術バカロレア、職業バカロレアの3種類がある。2022年6月のバカロレア受験者729,426人の内訳は、普通バカロレアが377,248人(51.7%)、技術バカロレアが144,989人(19.9%)、職業バカロレアが207,189人(28.4%)である。なお、2022年の数値は速報値である(以下、同じ)。本稿では日本の大学入学試験に最も近い普通バカロレアを中心に論じる。

最初に評語(mention)に関するバカロレアの制度を説明する。評語とは、結果に対する試験官の評価を示す言葉である。日本の秀、優、良などに当たる。フランスの試験では伝統的に20点満点が用いられ、バカロレアは総合平均10点以上取れば合格する。合格者に付与される評語は、基本的に3種類ある。16点以上にTrès bien(秀)、14点以上にbien(優)、12点以上にassez bien(良)が与えられる。2021年から18点以上にTrès bien avec les félicitations du jury(審査員からの祝福を添えた秀)が付けられるようになり、2021年は0.9%、2022年は1.0%が獲得した。

10点以上12点未満は、評語無し(sans mention)の合格となる。8点以上10点未満の不合格者には再試験(rattrapage:挽回)の機会が設けられる。第2グループという名称で呼ばれるこの受験者たちは、発表翌日以降に実施される口頭試問を2科目受験し、その結果、総合平均が10点以上に達すればバカロレアの資格が得られる。2022年は53,083人が挑み、その68.1%が追加合格となった。10点を越えなかった場合は、中等教育修了証書のみが与えられ、高等教育機関を受験することはできない。また、COVID-19に感染するなど、やむを得ない事情で受験できなかった受験生のための追試験は9月に入ってから行われる。

#### 3.3 改革案の概要と内包された課題

フランスのバカロレア改革案は2018年2月14日、国民教育省のミシェル・ブランケール大臣が、閣議後

その概要を公表した。最大の変更点は、従来リセ最終学年の最後、約1週間に渡って実施されてきた試験の科目数をほぼ半分に減らし、代わりに継続的評価(以下、「内申点」と表記する)を導入したことである。評価の割合は試験60%、内申点40%とされた。

もう1つの大きな変更点は試験期の回数を1回増やしたことである。バカロレアというと、3年次の6月、哲学(試験時間4時間)から始まる一連の記述試験が有名だが、同じ時期、2年生もバカロレア試験を受けている。フランス語の筆記試験と口頭試問である。フランス語の授業は2年次で終了し、哲学の授業に代わるため、この時期に試験を受けて得点を1年後まで保持する。つまり従来のバカロレアの試験期は、2年次6月と3年次6月の2回あった。それが改革により2年次6月と3年次3月:2~3年次に選択履修した2つの専門科目の筆記試験(一部科目には実験等の実技試験も付随する)、3年次6月:哲学の筆記試験と最終口頭試問(Grand Oral)の3回に変更された。

新たにバカロレアに導入された専門科目2科目の試験を3年次3月に置いたのが新機軸である。従来この時期にバカロレア試験は設定されてこなかった。しかし3年次の学年末に過度の負荷を与える「一発勝負」の試験を減らし、内申点を導入し、試験期を分散することによって学習の平準化を図りたい。そのような意図に基づいて制度設計がなされている。改革のキーワードは「簡素化」と「負担減」である。

ここで注目すべきは、改革によってどの科目が重視されたかである。そこでリセ改革<sup>2)</sup>前の普通バカロレアの科学系(S)の試験科目の係数(20点満点を何倍に評価するか)と、新しいバカロレアの試験科目の係数を比較する。結果は以下の表1に示す通りである。

表1 改革前後の科学系(S)の科目ごとの係数

科目	旧係数	新係数	備考
フランス語	4	10	2年次必修 筆記・口頭試問各5
専門科目1	9	16	2~3年次継続し選択履修
専門科目2	8	16	2~3年次継続し選択履修
哲学	3	8	3年次必修
最終口頭試問	0	10	新設

注) 細尾(2018:95)及び国民教育省HP<sup>3)</sup>から第1著者作成

旧バカロレアでは、表1の科目以外に、ほぼ同数の科目の試験を受けていたので、単純に新旧の係数を比較することはできない。また、人文系(L)では哲学

の旧係数は7だったので、新係数の8は1増えただけである。以上を踏まえた上で確認する。

新しいバカロレアでは、専門科目2科目の係数合計は32となり、最終成績100のほぼ3分の1を占めている。加えて、最終口頭試問で受験生がプレゼンテーションする内容、つまり審査員と面接で質疑応答する内容も専門科目1科目に関するものである。面接の直前、専門科目2科目の中から1科目が試験官によって選ばれる。したがって、専門科目2科目の係数及び専門科目1科目に関する最終口頭試問の係数を合計すると  $16 + 16 + 10 = 42$  となる。試験に与えられた係数60のうち3分の2以上を、2つの専門科目が占めることになる。新しいバカロレア試験では、自ら選択して履修する専門科目の比重が圧倒的に大きい。

内申点の場合も同じである。表2に内申点の対象となる必修科目とその係数を示す。やはり(2年次のみを選択履修する)専門科目1科目の係数8が最も高い。先の42と加えれば50となって、総合成績のちょうど半分を専門科目が占めている。

表2 内申点の係数

科目	合計	2年	3年
歴史・地理	6	3	3
現代外国語A	6	3	3
現代外国語B	6	3	3
科学	6	3	3
専門科目	8	8	0
体育・スポーツ	6	0	6
道徳・公民	2	1	1
7科目合計	40	21	19

注) 国民教育省のHP<sup>4)</sup> から第1著者が作成

実は、表2のリストに潜む問題点は、普通リセ2～3年次の必修科目に数学が含まれていないことである。数学が選択科目となったため、フランスの普通リセで2～3年次に数学を学ぶ生徒が激減した。とりわけ女子が数学を回避したことが報告されている(MENJ, 2022)。既に国民教育省が検討を始めた事項ではあったが、2022年6月2日マクロン大統領はマルセイユで「新年度の9月から数学を2年次の必修科目のオプションとして入れたい」と発言した。その翌日にはフランス政府のホームページに、高校2年で数学を選択していない生徒に2022年9月から、従来の「科学」(週2時間)に加え、「数学」(週1.5時間)を追加して学習できることが明記された<sup>5)</sup>。大統領の発言通

り、必修科目ではなくオプション科目としての導入である。対応は迅速だ。しかしCOVID-19の影響で教員不足が深刻な折、短期間で多数の数学教員を配置できたのか、懸念される。

## 4 COVID-19

### 4.1 COVID-19 への主な対応

次にバカロレア改革過程におけるCOVID-19への主な対応を時系列に沿って記述する。

2019年は結果的に旧制度のバカロレアが通常通り行われた最後の年となった。2年次のフランス語の試験及び3年次の哲学の試験等は6月、追試験は9月に実施できたので、特別な対応は不要だった。パリ郊外で肺炎患者が入院し、COVID-19による国内感染が疑われたのは2019年12月27日である。

2020年は旧制度のバカロレアが実施される最後の年となるはずだった。しかし、1月24日にフランス国内初のCOVID-19の感染例が発見され、3月12日には学校閉鎖、3月17日から5月10日まで初のロックダウンとなった。6月のバカロレア試験は中止され、リセの内申点だけで合格者を出すという異例の年となった。第1次世界大戦、第2次世界大戦下でもバカロレア試験は途切れることなく続いてきたので、フランス国民にとって未曾有の状況を経験することとなった。

2021年はアルファ株の流行により、パリなど16県が3月19日から3回目のロックダウンに入った。フランス全土も4月3日から6月30日まで後に続いた。その間、3月に予定されていた専門科目の試験は中止された。哲学の試験と最終口頭試問は予定通り6月に実施された。この2科目の試験の成績に高校の内申点(普通バカロレアの場合、哲学の試験の係数8、最終口頭試問の係数10の合計18を引いた82%が内申点)を加えて合格者を出すことになり、異例の年が続いた。

なお、哲学の成績については、内申点と6月の試験のどちらか良い方を取るという調整が図られた。ただし、当日は正当な理由なく試験を欠席すると0点になるため、哲学の内申点が良好な生徒も含め、例年通り全員が哲学の試験を受験した。この年は哲学の問題の選択肢が1つ増え、3つから4つに増やされている。

哲学の試験は、例年、実施されるたびにマスコミでも大きく取り上げられ、フランスのバカロレア試験の「顔」として知られている。改革前は特権的に試験初日に設定され、1週間ほど続くバカロレアの開始を告げる役割を果たしていた。しかし、哲学の試験は改革後も6月実施のままとされたので、3月の専門科目試験の、言わば後塵を拝する形になってしまった。



さらに大きな変更点として、内申点の評価構造が挙げられる。2018年のバカロレア改革案公表時は、内申点40%のうち、いわゆる平常点は10%で、残り30%が共通問題（国の問題バンクから選ばれた問題。言わば「外部試験」）の試験結果が使われることになっていた。学校間の内申点の不平等を避けるための措置である。しかしこの制度は十分に機能することなく廃止された。通常の授業実施が困難な折、年に3回、該当する生徒全員を同じ場所に集め、共通問題を解かせ、採点は別の学校の教師に頼むというシステムの維持は不可能に近く、廃止の大きな理由の1つがCOVID-19にあったことは間違いない。デルタ株の流行が完全に収束しないまま、年末にかけてオミクロン株の流行も始まり、2021年12月29日には1日の新規感染者数が20万人を越え、過去最多を更新することとなった。

2022年は、1月の大流行を経て2月末には5万人台まで減ったが、3月は上昇に転じ、4月上旬には16万人台を記録した。再び減少し5月末には4,800人となる。バカロレア試験は、3月14日～16日に予定されていた専門科目の試験を5月11日～13日に延期して実施した。高校3年で専門科目を学ぶ期間が2か月延びたが、試験範囲はそのままとされた。わずかな期間で同じレベルの問題を作り直すことは困難で、3月の問題を5月に使うことは止むを得ない措置だったと思われる。なお、各リセには試験直前の2日間は通常の授業を実施せず、専門科目の復習に充てるようにという指示が国民教育省から出された。

試験問題には選択制が多く採用された。例えば「歴史・地理、地政学、政治学」（試験時間4時間）は、全2問のうち第1問は2つの設問からどちらか1つを選んで解答する方式である。「数学」（試験時間4時間）は、全4問中3問を選んで解答する方式だった。このような選択制の導入は、受験生に事前に周知されており、授業を完全に受けられなかった生徒たちの不安を減らす役割を果たした。選択制は内申点をつける際にも多くの科目で導入されている。加えて試験範囲を狭める措置も取られた。例えば2年次のフランス語の口頭試問では、対象となる作品の数が例年の20から16に減じられるなど、負担軽減が図られた。

その中であって、専門科目の試験が3月から5月へ延期されたことには別次元の問題が内包されている。次節で述べるパルクールシュップ（Parcoursup）と呼ばれる高等教育進学制度と関連する問題である。

日程変更以外の対応としては、係数に微調整が施された。その意図は、比較的落ち着いた学習に臨むこと

ができた2年次の成績の配分を大きくするというものである。加えて科目間の係数差を縮め、より全体として結果に反映させる変更が行われた。調整後の係数は表3に示す通りである。プラスとなった係数をイタリックと下線、マイナスとなった係数をボールドで示す。

表3 COVID-19による内申点の変更

科目	合計	2年	3年
歴史・地理	<i><u>6.33</u></i>	<i><u>3.33</u></i>	3
現代外国語A	<i><u>6.33</u></i>	<i><u>3.33</u></i>	3
現代外国語B	<i><u>6.33</u></i>	<i><u>3.33</u></i>	3
科学	<b>5</b>	<b>2.5</b>	<b>2.5</b>
専門科目	<b>5</b>	<b>5</b>	<b>0</b>
体育・スポーツ	<b>5</b>	<b>0</b>	<b>5</b>
道徳・公民	<b>1</b>	<b>0</b>	<b>1</b>
2年次全科目平均点	<u>5</u>	<u>5</u>	0
8項目の合計	40	<u><b>22.5</b></u>	<b>17.5</b>

注) 国民教育省のHP<sup>6)</sup> から第1著者が作成

表3の下から2番目の行にある「2年次全科目平均点」は特例として新たに加わったものである。2年次に学んだ科目（オプション科目を含む全科目）の内申点を平均し、それに係数5をかけた値を「あらためて」2年次の内申点に加えるという異例の措置である。いわばこの学年だけ特別に「下駄を履かせた」格好になっている。

#### 4.2 COVID-19の影響：受験者・合格者・合格率

ここからはCOVID-19がバカロレアに与えた影響を、基本的な集計データに従って見ていく。最初に2019年から2022年までのバカロレア試験の受験者、合格者の人数及び合格率を確認する。

表4 バカロレア受験者数・合格者数・合格率の推移

年	受験者数	合格者数	合格率
2019年	759,111	668,343	88.0%
2020年	760,833	722,971	95.0%
2021年	732,458	687,428	93.9%
2022年	729,426	664,300	91.1%

注) DEPP2019～2022から第1著者が作成

内申点100%で評価された2020年と、内申点82%で評価された2021年の合格率が突出している。普通バカロレアに限って見れば、2020年は98.6%、2021年は97.6%の受験生が合格していた。

ただ、バカロレアの合格率が異常な伸びを示した年が過去に無かったわけではない。1968 年の合格率は 81.3%で、前年の 59.6%から 21.7 ポイント上昇した。「五月革命」の年である。

#### 4.3 COVID-19 の影響：学士号取得率

バカロレア改革の背景として常に挙げられてきたのが、フランスの大学における学士号 (licence) 取得率の低さである。先の 2018 年 2 月 14 日の記者会見で、ミシェル・ブランケール国民教育相は「バカロレア試験の合格率は 90%だが、学士号レベルの不合格率は 60%で、バカロレアはもはや高等教育での成功の真の予測因子とは言えない」と述べている。

2021 年 11 月、高等教育省が明らかにした報告 (MESRI, 2021) によれば、主に 2016 年 7 月にバカロレアを取得して同年 9 月に大学に入学した学生のうち、2 年に進級したのが 41.1%、3 年に進級したのが 33.0%、卒業にこぎつけたのが 29.6%である。つまり 2016 年 9 月に大学に入学した学生のうち、規定の修業年限 3 年で学位を取って卒業したのは 3 割に満たない。1 年留年するなどして 4 年で卒業した学生を加えても 43.6%で、半分まで行かない。

このような状況を踏まえながら、2020 年の大学 1 年次から 2 年次への進級率を見る。2019 年の新規バカロレア取得者が大学に入学し、翌 2020 年に licence2 を取得した率は 53.5%だった。先の 2017 年の取得率 41.1%と比べると異常に高い。2018 年の取得率 43.7%より約 10 ポイント高く、2019 年の取得率 45.5%より 8 ポイント高い。2020 年のバカロレア合格率が異常な高さを示したように、2020 年の大学 1 年次から 2 年次への進級率も異常な伸びを示していた。これは、普通に考えれば COVID-19 の影響である可能性が高い。しかし、次節で述べるパルクールシュップと関係する事象でもあり、結論を置きたい。

参考までに、リセ最終学年の留年率を見ておく。フランスではバカロレアに不合格となった場合、高校に留まって学び直すのが普通である。2020 年、あれほど高いバカロレアの合格率が出たのであれば、リセの留年率は大きく下がったことが予想される。実際 2020 年の普通・技術リセ 3 年次の留年率は 1.4%だった。2013 年以來、留年率は 6%前後で推移してきた。2005 年は 11.8%と二桁だったことを考えれば、2020 年の 1.4%は、明らかに「COVID-19 バブル」とでも言うべき基準の引き下げが起こったと考えられる。

#### 4.4 COVID-19 の影響：評語の取得率

2020 年は坂本 (2021) のいうように評語 Très bien を得た合格者の割合が急増した。Très bien だけでなく、評語を得た合格者全体の割合も、前年より 16.6 ポイント増加した。ただ、新バカロレアの 4 科目の試験が実施された 2022 年の数値は、幾分揺り戻しの局面に入った感があることを示す。

表 5 評語取得者の割合の推移

年	Très bien	bien	Assez bien	計
2019 年	7.1%	14.1%	25.8%	47.0%
2020 年	10.9%	20.7%	32.0%	63.6%
2021 年	8.8%	21.3%	34.1%	64.2%
2022 年	9.0%	19.5%	30.3%	58.8%

注) DEPP2019~2022 から第 1 著者が作成

一方、表 5 の左下、2022 年の Très bien 取得率だけは、前年より 0.2 ポイント増加している。この数値を普通・技術・職業バカロレアの種類別評語取得率で見ると、表 6 のようになる。

表 6 2022 年バカロレア種類別評語取得率

種別	Très bien	bien	Assez bien	計
普通	14.3%	24.5%	30.3%	69.1%
技術	2.1%	11.6%	30.9%	44.6%
職業	4.2%	15.8%	29.9%	49.9%
全体	9.0%	19.5%	30.3%	58.8%

注) DEPP2022 から第 1 著者が作成

普通バカロレアの受験者層は別格であることが分かる。そこで、普通バカロレア受験者の学力上位層の 4 年間の動きを表 7 に示す。

表 7 普通バカロレア評語取得者割合の推移

年	Très bien	bien	Assez bien	計
2019 年	11.7%	16.8%	24.0%	52.5%
2020 年	16.5%	22.5%	29.3%	68.3%
2021 年	11.8%	25.9%	33.9%	71.6%
2022 年	14.3%	24.5%	30.3%	69.1%

注) DEPP2019~2022 から第 1 著者が作成

表 7 を見る限り Très bien の学力最上位層には、2022 年になっても揺り戻しは起こっていない。日本の高校の学力最上位層も、COVID-19 で学校活動が停止していた時期、「全て臨時休校、もう勉強するしかない」と覚悟を決めて勉学に励んだ生徒が多かった

(近藤, 2021: 47) という。グランゼコールを目指す準備学級に進学する生徒たちに同じような状況があったか否かについては確認できる資料が必要である。ただ本稿の文脈をたどるならば、そちらではなく 2022 年のバカロレア試験の難易度を問題にすべきである。3 月の試験問題をそのまま 5 月に使う時点で難易度は既に低くなっている。日本の 1 月の共通テストを 2 ヶ月後に試験することを想像すれば推測できるだろう。

2022 年 5 月 28 日の全国大学入学者選抜研究連絡協議会の折、第 1 著者は、直前に実施されたバカロレアの専門科目の試験の中から 5 月 11 日の「歴史・地理、地政学、政治学」の試験問題を提示し、学習指導要領 (programme) に照らしながら分析した (阿部・倉元, 2022)。正確には歴史や地理の専門家の評価を待ちたいが、試験問題を見る限りでは、例年に比べて難易度が低かった可能性が高い<sup>7)</sup>。

## 5 パルクールシュップ

### 5.1 パルクールシュップの概要

最後に、近年大きな変更が加えられた高等教育進学制度について触れたい。この知識が無いと、2022 年の専門科目の試験が 3 月から 5 月に延期されたことの影響、さらに、2020 年に大学で licence2 の取得率が例年になく高くなったこと的背景について、正しい理解が得られないからである。

パルクールシュップと呼ばれる、新たな高等教育機関進学プラットフォームの設置は、2018 年 1 月 15 日、フィリップ首相がパリのリセに赴き、ヴィダル高等教育相とブランケール国民教育相を従え公表した。新聞には「偽装選抜」"une sélection déguisée"などの表現が見られ (Parismatch, 2018.1.15)、批判的内容の記事が多く掲載された。

パルクールシュップでは、formation (「教育課程」の意だが、本稿では便宜的に「学部・学科」と訳す) が受験生に「期待されるもの」(attendu) を示す。志願者が学部・学科の定員を超えた場合、内申点やバカロレアの成績、「期待されるもの」などによって出願書類を審査 (examiner) する。出願書類を審査して、序列化 (classement) を行う。したがって、パルクールシュップ以前の高等教育機関進学制度 APB (Admission Post Bac : バカロレア取得後事前登録制度) まで実施されていた「抽選」は行われない。

パルクールシュップでは、受験生は志願する高等教育機関等を、優先順位を付けずに 1 人 10 ヶ所まで登録し、志望動機や特記事項などを書いて出願する。リセからは日本の調査書に当たる (内容的には推薦書に

近い) 「将来カルテ」(fiche Avenir) が、受験生を介さず、リセから志願先へデジタルで直送される。すなわち、これら出願書類の審査を通して、実質的に進学先の振り分けが行われることになったのである。

パルクールシュップ登場以来、「フランスは大学入試が無いので、バカロレアに合格すればどこでも好きな大学に入れる」という幻想を信じることは、より一層難しくなった。その前提に立って、本節冒頭に掲げた 2 つの事象の影響と背景を明らかにする。

### 5.2 パルクールシュップと専門科目試験の延期

まず 2022 年 3 月に実施されるはずだった専門科目 2 科目の試験が 5 月に延期されたことの影響を探る。

表 8 バカロレア 2022 とパルクールシュップ 2022

日程	種別	内容
3/29~4/7	パルクールシュップ	出願
5/11~13	延期バカロレア	専門科目 2 科目の試験
6/2~7/15	パルクールシュップ	出願先から合否が来る
6/15	最終バカロレア	哲学の試験
6/20~7/1	最終バカロレア	最終口頭試問

注) 国民教育省の HP から第 1 著者が作成

表 8 にあるように、パルクールシュップでは、受験生は 4 月上旬までに出願を終える。したがって、3 月に試験が実施されていれば、その成績を出願書類に反映することができる。しかし 5 月の試験では間に合わない。4 月と 5 月は、学部・学科が受験生から受理した出願書類を審査する期間に当たるからである。2022 年には、専門科目 2 科目の試験が実施されたにも関わらず、受験生は前年と同じように、2 年次から 3 年次 1 学期までの内申点を記入して出願せざるを得なかった。5 月に延期された専門科目 2 科目の試験は、卒業成績には反映されるが、高等教育機関への進学には反映されない試験となった。しかし、そもそもバカロレアの哲学の試験と最終口頭試問の結果はパルクールシュップに反映されない。哲学の試験が始まる前から受験生は合否メールを受け取り始める構造である。

### 5.3 パルクールシュップと大学の進級率増加

次に 2020 年の学士号 licence2 の取得率が大きく改善したことの影響を探る。

新しいバカロレアでは、どの専門科目を選ぶかが重要になる。専門科目の組み合わせが合格の鍵を握ると



言っても過言ではない。パルクールシュップでは、日本の大学のように、高等教育機関が特定の専門科目の組み合わせを受験生に要求することはできない。フランスの大学は公式には選抜ができないので、この辺りの事情は日本と異なる。しかし国民教育省が HP で公開している、法学部の受験生へ「期待されるもの」<sup>8)</sup>の「法的根拠に基づいて文章を整理し、場合によっては批判することができる」などを自分の志願先サイトに見つけた高校生は、単に自分が好きだからといって、「映像芸術」や「生命科学・地球科学」を選択し、それを2年間学んだ後で法学部を受験するのはやめた方がいいと考えるに違いない。以前のように、先着順や抽選で選ばれるのではなく、学部・学科の示す「期待されるもの」などを通して審査された学生が入学してくるのであれば、licence2 への進級率は上がらない方がおかしい。

## 6 考察

例年と異なる COVID-19 環境下でのバカロレア試験への特別対応を、国民教育省や高等教育省では「調整」(aménagement)と呼ぶことが多い。その調整には我が国の常識に照らすと、いささかバランスを欠いた調整(以下、「過剰な調整」と表記する)と考えざるを得ないものもある。

ここで両省以外による対応も含め、「過剰な調整」と考えざるを得なかったものを整理したい。まず、リセ側の「過剰な調整」としては、①2020年のバカロレア試験が中止された時、内申点が高くつけられた可能性があること、その結果、②2020年の評語取得率が例年になく高くなったこと、③2020年のリセ3年次の留年率が例年になく低くなったことがある<sup>9)</sup>。

また、2021年の各種データは、多くの項目でほぼ前年と変わらない値を示していることから、2020年の「過剰な調整」が翌年に持ち越された可能性を示唆する。中で2021年の「過剰な調整」として特に問題だと考えられるのは、④哲学の成績をつける際、6月に実施されたバカロレア試験の成績カリセの内申点かどちらか良い方を採用したことである。また意図せず結果として「過剰な調整」となってしまった事項として、⑤2022年の専門科目の試験が3月から5月に延期されたことが挙げられる。さらに「過剰な調整」かどうか著者たちが判断できなかったこととして、⑥2021年の2年次の内申点をつける際、限られた科目の評価を「ダブルカウント」したこと、⑦2022年5月に実施された専門科目の試験の難易度はどうだったか、ということがある。加えて、現時点では判断でき

ないが、将来明らかになる可能性があることとして、⑧2020年の大学の licence2 の取得率が例年になく高かったことが挙げられる<sup>10)</sup>。

2021年の哲学の試験で採用された「内申点か試験の成績のどちらかいい方を取る」という調整は、受験生に哲学の試験への敬意を減じさせた可能性が高い。「哲学の試験は名前を書いて出せば大丈夫」のように思った生徒もいただろう。そして2022年に専門科目2科目(係数合計32)の試験が5月に延期されたことは、状況的にやむを得なかったことは十分理解しながらも、それまで頑張って試験勉強に励んできた受験生の努力に報いる機会を失わせることになった。

このようなフランスの COVID-19 対応における「過剰な調整」は、グランゼコールを目指して準備学級に進学するような生徒を除き、大学進学を望む普通の高校生たちの意欲を削ぎ、学力伸長の機会を失わせた可能性が高い。これまで日本では、COVID-19 蔓延下にあっても、可能な限り例年通りの手続きと基準による大学入試を行うことに努めてきた(倉元ほか、2022)。受験生第一であることは論を俟たないが、「過剰な調整」によって受験生をスポイルすることがないように入試制度を、今後とも維持し続けていかなければならない。

## 注

- 1) 2022年のバカロレア試験の専門科目は「芸術」「歴史・地理、地政学、政治学」「人文科学、文学、哲学」「古代の言語・文学・文化」「外国と地域の言語・文学・文化」「数学」「情報科学」「物理・化学」「工学」「生命科学・地球科学」「生物・生態学」「経済学・社会学」の12科目である。芸術はジャンル別に、古代はラテンとギリシヤ別に、外国語は言語別に学び、試験問題も別々である。
- 2) バカロレア改革と同時に進められたリセ改革により、それまでリセに置かれていた科学系(S)・経済社会系(ES)・人文系(L)という3系列は廃止された。以前はバカロレアの試験問題もそれぞれの系ごとに異なっていた。
- 3) 国民教育省のHPには、毎年リセ2年生のため“Je suis en train de première générale. Comment calculer ma note de baccalauréat?”(私は普通高校2年生。バカロレアの自分の得点をどう計算する?)が公表される。
- 4) 同上
- 5) 3年次には、専門科目「数学」のほかに「補完的数学」「専門数学」というオプション科目があり希望者が選択している。今回の措置により2年次で専門科目「数学」を選択していない生徒にも基礎的な数学を学ぶ機会が設けられた。
- 6) 係数に変更されたので、3年生のために新たな集計表

“el-ve-de-terminale-g-n-rale-comment-calculer-note-bac-2022-94499-pdf” が公表された。

- 7) 各科目のバカロレア試験の難易度の変遷を示す公式資料は探すことができなかった。ではなぜ2022年5月11日の「歴史・地理、地政学、政治学」の試験の難易度が低かった可能性に言及できるかという、設問が学習指導要領の最初のページの最初の2つのテーマとほぼ同じだったからである。これは、各地の感染状況によってリセごとに学習進度が異なるため、最初の2テーマくらいは終えているだろうという判断に立って作題されたからだと思う。

大問1は小論文(dissertation)である。与えられた課題は2つ「1957年から今日までの宇宙開発：ライバル関係と協力関係」又は「異なるスケールにおける米国と環境」のいずれか1つを選んで記述する。前者は学習指導要領が示す学習テーマ1「新しい征服領域」に対応する問題である。ライバル関係や協力などに触れながら地上だけでなく宇宙や海洋の開発についても学ぶことになっている。

大問2は批判的検討(Étude critique)である。検討する対象として示されたのは、資料1が、フランス人なら誰でも知っているナポレオンのアウステルリッツの戦いを描いた版画である。資料2はアルカイダの戦争のやり方を記した、米国のノンフィクションの抜粋である。これも学習指導要領の学習テーマ2「戦争をする、平和を作る：紛争の形態と解決方法」と対応する。アルカイダについては、「クラウゼヴィッツのモデルが試される『非正規戦争』：アルカイダからイスラム国まで」と学習指導要領の学習計画の中に示されている。

- ・試験問題(2022年5月) <https://www.education.gouv.fr/reussir-au-lycee/bac-2022-les-sujets-des-epreuves-ecrites-de-specialite-341303> (2022年8月31日)
- ・学習指導要領(2020年9月) <https://www.education.gouv.fr/les-programmes-du-lycee-general-et-technologique-9812> (2022年8月31日)

- 8) 国民教育省のHP(n.d.)には、高等教育機関入学志願者に「期待されるもの」として次の法学の例が示されている。「文章力を示す文章表現力と弁論力を示す口頭表現力を統合する方法を知っている。文章を理解し、分析し、要約する能力を持っている。法的根拠に基づいて文章を整理し、場合によっては批判することができる。論理的・概念的な推論を行うことができる。自律的に学習を進め、段取りすることができる。世界的な視野と語学力を持つ。歴史的、社会的、政治的な問題に関心を持つ。」  
<https://www.education.gouv.fr/reussir-au-lycee/choisir-ses-enseignements-de-specialite-au-lycee-pour-preparer-ses-etudes-superieures-325475> (2022年8月31日)

- 9) Note d'Information de la DEPP 21.46によれば、2021年

の普通・技術リセの3年次の留年率は1.7%で、2020年の1.4%とほぼ同じ水準だった。

- 10) Note Flash du SIES 22.30によれば、2021年度開始時、2020年にバカロレアを取得した学生の47.8%がlicence2を取得していた。2018年は43.7%、2019年は45.4%、2020年は53.5%、2021年は47.8%である。やはり2020年は大学においても1年次から2年次への進級に際して「過剰な調整」が図られ、進級の基準が緩くなっていた可能性を示唆する。そこにバクルールシュップの効果がどれほど含まれるのか、更なる検証が必要である。

## 謝辞

本研究はJSPS科研費JP21H04409の助成による研究成果の一環である。

## 参考文献

- 阿部和久、倉元直樹(2022)。「バカロレア改革の現状と課題」全国大学入学者選抜研究連絡協議会第17回大会研究発表予稿集(オープンセッション用)、78-83、独立行政法人大学入試センター・明治大学、2022年5月26-28日  
大学入試センター研究開発部報告書(2022)大学入試センターシンポジウム2021「COVID-19の災禍と大学入試」  
細尾萌子(2018)。「フランスの高大接続からのヒント-思考力・表現力と内申点の評価-」名古屋大学高等教育研究センター第156回招聘セミナー  
近藤明夫(2021)。「現状報告1：臨時登校・分散登校下での『学習の遅れ』の回復」,第34回東北大学高等教育フォーラム新時代の大学教育を考える[18]報告書,44-51,東北大学高度教養教育・学生支援機構・国立大学アドミッションセンター連絡会議  
倉元直樹、宮本友弘、久保沙織(2022)。「コロナ禍の下での大学入試を振り返る-主として2021(令和3)年度入試に関連して-」東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要,8,95-107  
MENJ(2022)/Ministère de l'Éducation Nationale et de la Jeunesse, Note d'Information de la DEPP 22.17  
MESRI(2021)/Ministère de l'Enseignement Supérieur, de la Recherche et de l'Innovation, Note Flash du SIES 21.24  
Parismatch(2018年1月15日). <https://www.parismatch.com/Actu/Societe/Parcoursup-la-nouvelle-plateforme-pour-les-voeux-post-bac-1438469> (2022年8月31日)  
坂本尚志(2020)。「なぜバカロレア改革は混乱を引き起こしているのか——平等と選抜のフランス的ジレンマ」伊藤美歩子編『変動する大学入試——資格か選抜か、ヨーロッパと日本』大修館書店,123-142  
坂本尚志(2021)。「コロナ禍とバカロレア-改革のゆくえ-」フランス教育学会紀要 33,113-118